

---

## 外国語の難易度の相対性

石 井 陽 一

スペイン語は易しいという神話がある。易しいとか難しいとか言うことは相対的なもので、何を基準とするかが問題である。動詞を基準にして考えると、ヨーロッパ語の中で一番易しいのは英語であろう。その次がドイツ語かもしれない。ラテン系は動詞の変化は大変である。名詞の性に関しても英語は易しいというよりは無いに等しい。スペイン語は、ドイツ語やフランス語よりは易しい。自然の性はそのままで、たとえばドイツ語のよう

に、娘さんが das Mädchen と中性になることはない。それと語尾である程度性を推定できる。だから男性や女性の定冠詞をつけて単語を覚えることはない。格変化となると難しいのはドイツ語で、スペイン語も英語も大したことはない。英語が難しいのは spelling と発音が違うことが多いことであろう。スペイン語はこの点は易しく、ローマ字どおりの発音も多い。特に “シ (si)” という発音はまさに日本人向きである。また、英語は中腹ま

で登るのは容易だが（多分それが英語を貿易の共通語にした一因）、例外が多いので頂上がなかなか見えないという難しさもある。たしかに相対的にはスペイン語は易しいということになるかも知れないが、神話を信じてスペイン語を選択した学生は話が違うという心境になるようだ。ほんの少数ながら毎年動詞の変化拒絶症のような学生に出会う。私は元来は語学の教師ではない。しかし本業のラテンアメリカ地域研究、法律スペイン語だけではコマ数が足りないせいもあって、僭越ながら他学部のスペイン語を若干受け持っている。だから私の所感は素人の暴論かもしれない。

私の時代は、第二語学といえば、ドイツ語だった。旧制高校に二年ほど在籍していたが、その後

新制大学に移ってからもそのままドイツ語をとった。旧制では第二語学でも週7時間あったから、かなりの時間ドイツ語をやったことになる。昨年10月ウィーン大学で開催された先住民と環境問題という国際セミナーの使用言語はドイツ語とスペイン語だったが、私は、主として卒業後仕入れたスペイン語で発表し、それがドイツ語で同時通訳されたのは妙な気分だった。結局語学というものは、ある必要に迫られ、意欲を持って学んだものが身につく、使わないとすぐ錆がつくということであろう。さて、いま私が教えている週3時間2年間（貿易学科はなんと1年間でもよい）のスペイン語を習っている学生の将来やいかに、と時々思うのだ。